

汗だくで教えてくれた先生たち

プノンペン大学外国語学部日本語学科長
ロイ・レスミーさん

日本企業の進出が花盛りの今、カンボジアの日本語人材は引く手あまた。プノンペン大学日本語学科の学生数も、現4年生は43人だが、3年生は75人、2年生は114人、12月に新入学する1年生は175人と、うなぎのぼりだ。

人気の日本語学科で学科長を担うのはロイ・レスミーさん（39）。10年前に29歳の若さで学科長に就任した。しかしカンボジアの日本語教育は長い間、「冬の時代」にあった。

レスミーさんが日本語と出会ったのは高校卒業後。プノンペン大学の掲示板で見た「日本語教室開設」の張り出しだった。当時はまだ日本語学科はなかった。生物の教師になりたい、と考えていたレスミーさんだが、地方から都会の新しい世界に飛び込んだ若者にとって、外国語という未知の世界は魅力的だった。

日本語教室では、JICAから派遣された青年海外協力隊員の先生がいて、無料で授業が受けられた。若い日本人の先生たちは、冷房もない教室で汗だくになりながら教えてくれた。でも、44人でスタートした教室は、卒業までに、レスミーさんを含めた3人に減ってしまった。1990年代の半ば、まだ混乱が続く復興の途上にあったカンボジアに進出する日本企業は、数えるほどだった。日本語人材の需

要もなく、勉強を続ける人は少なかった。

1997年、卒業の年。「日本語教師にならないか」と言われ、レスミーさんも迷った。だが真っ先に思い浮かんだのは、隊員の先生たちの姿だった。「あの思いを無駄にしたくない。たった3人しか卒業生がいないのだから、私がやらなければ、カンボジアに日本語教育が残らない」

日本語教師の道歩んだレスミーさんは、プノンペン大学に日本語学科を設立するという任務を背負って昭和女子大に留学。「何があっても挫折できない。期限を延ばすこともできない。重圧だった」。2005年に学科は設立された。それから、入学希望者の確保、卒業生の就職先と、レスミーさんの苦労は続いた。日本企業が多く進出し始めたここ数年、ようやく学科が注目されるようになった。

日本語が話せるというだけでは「人材」にはならない。レスミーさんは学科長として、語学だけではなく、日本を知る、日本人を理解できる架け橋となる人材を育てたいと思っている。レスミーさんは「これまでは日本語学科を知ってもらうのに必死でしたが、これからは教育の質をもっと深めたい」と話す。

